

# 親孝行な重介<sup>じゅうすけ</sup>

平成九年十一月五日号

天間南にある畑の中に、重介のお墓がひっそりと建っています。親孝行と一口に言ってもなかなかうまくできないものですが、母と二人暮らしの重介は、評判の親孝行者だったということですよ。

今回は、天間に伝わる親孝行な重介のお話です。

昔、天間に重介という男の子がいました。重介が三歳のときにお父さんが病気で亡くなつてしまい、お母さんと二人で暮らしていました。

ところが重介が六歳のとき、お母さんが突然重い病気にかかり、目が見えなくなつてしまいました。重介はまだ小さいのに、お母さんの面倒を見たり、お母さんの分まで仕事をしたりしなければならなくなつたのです。よその家の手伝いをして、お米やみそ、野菜などをもらつて生活をするようになりました。近所の人はそんな親子を気の毒に思い、ときどき食べ物を届けていました。

重介が九歳のときです。高熱が続いて働けなくなり、食べ物は何もなくなつてしまいました。そのとき、目の見えないお母さんが近所の人に助けを求め、外へ出かけようとなりました。それを見た重介は、お母さんを引きとめ、ふらふらしながらもよその家へ行つて手伝いを始めたのです。これを見た近所の人たちは強く心を打たれ、いろいろなことで重介親子を助けてあげました。

その後、昼間は仕事をし、夜はお母さんを

いたわる重介のことが殿様の耳にまで届きました。殿様は重介にとっても感心し、たくさんの褒美をくださったそうです。

榊原安三さん（天間）  
やすぞう

重介という人は、望月但馬守久吉という武士の子孫とも伝えられているようです。六十一歳で亡くなった重介のお墓は、お母さんのお墓と仲よく並んで建てられています。

鷹岡町史によれば殿様というのは水野忠友で、親孝行な重介の表彰は天明八年（一七八八年）九月に行われたということです。また、官刻孝義録かんてくこうぎろくという孝行者ばかりを集めた本にも重介のことが掲載されているそうです。

最近でも、この親孝行な重介の話は天間地区のPTAや子ども会で取り上げられることがありますし、ほかの地区の人が重介のお墓を訪ねてくることもありますよ。



▶ 静かにたたずむ重介とその母のお墓